

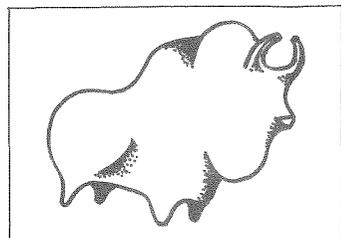


Title	丑年のはじめにかげの功績をたたえる
Author(s)	藤野, 恒三郎
Citation	makoto. 1973, 1, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86287
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



丑年のはじめに かげの功績をたたえる

藤野 恒三郎

(大阪大学名誉教授)

私は、医学の歴史の研究に力をそいでいます。中でも種痘の歴史に特別な興味をもっています。エドワード・ゼンナーの研究を中心において、その前と後を調べています。

「痘瘡のすんでいない子供を、我が児と思うな」と、愛児が痘瘡の流行に際して、悪魔に連れ去られるのを恐れた、覚悟した親たちの愛情を、この戒めの中に見ることができます。

こうした恐ろしい悪疫に対して、人間はどう対応したかを知ることが、**「人間の知力の発達史」**を知ることになります。

人間はどのように発達してきたかを、できるだけ詳しく調べ、記録する、説明すること、それは文明史の使命であります。それで私は、「種痘法の発達史」を、**「人間の知力発達史の代表と考えてみたいのです。」**

戦争の歴史や絵画の歴史が、人間知力発達史を代表するものであると、討論をしかけてくる人があるかも知れません。

勿論、私は、「それはちがいます」と申しません。それらの立論と資料について、私は知るところが少いので、反論できないのです。ただ、種痘法の歴史は医学史の中での、人工免疫法の歴史と言うだけではなく、人間知力の発達史の、面白い、適切なサンプルだと思っているのです。

その中の、中心は、一七九六年五月十四日であります。この日、エドワード・ゼンナーは牛の乳しぼり女、サラ・ネルメスの手にできている膿疱を、八才の少年フィッブス(ゼンナーの子ではありません)にうえたのでした。その後、自然流行痘瘡の膿をうえてみましたが、予

期した通り、この少年は痘瘡にかかりませんでした。

このことは、二年後に印刷公表されたゼンナーの論文の中に明記されているのです。

牛の痘瘡の膿を子供にうえると、子供の痘は軽くすみ、生命



の危険がない、しかも、恐ろしい痘瘡の流行に際して、発病をまぬがれることを、系統的に研究して発表したのはゼンナー論文

であります。

はじまりは、牛にできた牛痘の膿を人にうえ、この人の膿を人から人へうえて、ゼンナー牛痘種痘法は、地球上に発展していきました。

ところが、ゼンナー種痘法が普及した結果、種痘のたねの大量生産の必要に迫られたので、牛には気の毒だが、牛の身体の皮膚に、広い面積に牛痘を作って、それをかき集めて、各地の人間にうえる方法が考え出され、日本でもこれを実施しました。

人から人へのたねつぎは、日本の津々浦々では、明治の末まで行われましたが、明治初年に、牛を用いる「痘苗製造所」が東京にできました。ついで大阪に。

ここから、牛は医学上、なくてはならない貴重動物となつて

しまいました。牛にとって大きな迷惑となつたのでしようが。

牛をよく洗って、消毒薬で皮膚をきれいにしてから、皮膚に浅い切り傷をつけて、その上にウイルスをうえるのです。

牛は痛がり、あばれますので牛を上向きにねかせて、四本の足をしばって動けなくして、腹の皮膚を用いるのです。

約七日目に、同じく上向きに固定して、血液が出ないように軽く、皮膚の膿液をけずりとる、これが痘苗の原材料です。

恐ろしい流行病の親玉、痘瘡の流行が、近年見られなくなつたことと、種痘副作用問題が大きく社会問題化したために、強制種痘が取り止めになる方向で検討されていることは事実です。ただし、大きな条件つきでありますので、種痘廃止ではありません。

牛には、まだまだ、人間のために働いてもらわねばなりません。

附図説明

岡山縣土族・難波立憲の著書・種痘傳習録(明治九年一七八七)の附録にこの絵がのっています。

牛痘種痘所の技術を図で説明している、珍しいものです。